

がん患者と相談者のための就労セミナー  
**がん治療と仕事を両立させる**

福岡市男女共同参画センター アミカス 4階ホール

5月から始まったピアサポート養成講座を終えた後、九州がんセンターの全面協力を実現したこの養成講座は、がん・バツテン・元気隊代表の波多江伸子さんと運営委員会を担う県内患者会代表が企画しました。医学が進歩し、医療環境がよくなりがん患者の生存率が向上したことにより、治療と仕事を両立させる新たな課題が出ています。本日の**セミナー**は、養成講座のシリーズを終えた節目、そして第2弾として開催いたしました。

第1部 座長：藤也寸志さん（九州がんセンター副院長）

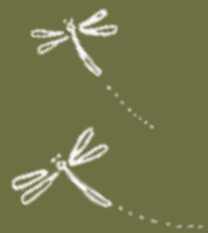
13:10～(40分間) **がん患者の就労を含めた社会的問題への対応**  
(若尾文彦さん / 国立がん研究センター がん対策情報センター長)

13:50～(40分間) **働くがん患者が望むこと**  
(三好綾さん / NPO法人がんサポートかごしま理事長)

第2部 14:30～(90分間) 座長：深野百合子さん（乳がん患者会 あげぼの福岡代表）  
竹山由子さん（九州がんセンター 相談支援係長）

**アンケート調査の結果について**（福田忠昭さん：NPO法人福岡がんサポートセンター）  
**相談支援センターの立場から**（松尾由佳さん：九州がんセンター 医療ソーシャルワーカー）  
**がんと経済的問題**（渋谷逸郎さん：社会保険労務士）  
**患者体験発表**（小手川律子さん：乳がん患者会・有職者）  
**産業カウンセラー**（田上裕子さん：産業カウンセラー）

**パネル討論**（演者8名）



**病気については医療者に聞けばいいけど、  
仕事のことはどうすればいいの？**

第1部は、座長に九州がんセンターの藤先生をお迎えし、国立がん研究センターの若尾先生をはじめとする医療者による支援体制の実状を聴く貴重な機会となりました。また、自らが乳がん患者でありNPO 法人がんサポート鹿児島代表を務める三好綾さんからは、NPOとしての支援体制だけではなく、がんサバイバーとしてのご自身の就労問題を含めたお金の問題や率直なお話をたっぷり伺いました。

**「がんサバイバー」とは？**

がんと診断された時からいかにその人らしく生き抜くかを重視して生きる人のこと。これは5年生存率、治療効果、生存期間などの向上などを目指す医療とは違う考え方であると言えます。

Fukuoka, JP □□□□

22°C Sat, 5.Oct. 2013

## がん患者として負い目を感じると 会社内でもつい「すみません」という言葉が出るかもしれないけれど...



がんが不治の病ではなくなった今、仕事をしながら数週間に1回入院して抗がん剤の治療を数クールするケースも多いそう。その入院中でもベッドに寝たきりの病人ではないそうで、副作用さえ出なければ抗がん剤投与以外は具合は悪くないので様子を見るだけのことも多いとのこと。しかしがんサバイバーにとっての大きな課題の一つが、その就労上の問題です。望まない部署に異動させられたりやめ

させられたりということが少なくないのが現状です。がん＝不治の病というイメージが強い事が原因だとのことですが... 恐いがんのイメージも実際変化してきてはいますが、職場に求める事として**簡単に人材を手放さないで**との三好さんの言葉が印象的です。**治療と同じくらい仕事は大切だ**と。がん患者として負い目を感じると会社内でもつい、すみませんという言葉が出るけどそれを、ありがとうに変えるだけで見方が変わってくる、という若尾先生は仰います。

## 抗がん剤治療は1回10万円を計4回、 さらに退院後の通院中には定期的な検診費用として...

三好さんは27歳のときに乳がんを告知された後、患者会活動などを経て今は鹿児島市でNPO法人**がんサポートかごしま**の理事長をされており、厚生労働省がん対策推進協議会委員も務められています。ご自身の闘病生活を例に、お金に関する具体的な数字を挙げ問題点を話されました。ご自身も離島に住まれており、交通費などの金銭的な負担のせいで十分な治療が受けられないことや島ならではの課題に悩まされるがん患者が多いとのこと。離島にもがん診療連携拠点病院は存在する場合がありますが、できれば本土の鹿児島市内で治療を受けたいと考える患者さんが多く、その場合治療費に加えガソリン代や船賃、宿泊費などがプラスされるので経済的負担が大きく、実際に三好さんが支払ってきた数字には聴講者からも驚きの声があがりました。例えば標準治療でも手術に50～70万円、抗がん剤治療は1回10万円を計4回、さらに退院後は通院中の定期的な検診費用として血液検査・マンモグラフィ・エコー



や骨シンチグラフィに計5万円。また入院中の家族のお見舞い交通費に20万、下着やウィッグ代に20万、その他諸経費が沢山あるとのこと。全摘の手術後今も経過観察中で、後遺症のリンパ浮腫と付き合いながらセミナーや講演に日々奔走されています。離島での活動も最近では徐々に活発になっているようで、離島でがんの市民講座を開催すると毎回満席になるそうです。離島民がいかに情報を求めているかがよくわかる



とのこと。ネット上ではがん対策情報センターが発信する様々な情報を得られますが、高齢の患者さんがアクセスするのは難しいことです。そういう地域にこそ必要になるのが、患者さんの悩みに応えたりさまざまな情報を提供してくれる相談場所なのだ改めて実感しました。

## 人に、がんであったことを言うか、言わないか。



第2部のパネル討論は、福岡県内のがんと就労者についてのアンケートを元にした集計結果の発表から始まり、社会労務士や産業カウンセラーによる、企業側、そして医療者側からのがん患者の就労についての問題点を提起して頂き、それぞれの立場を比較しながらの座談会です。座長の竹山さんは九州がんセンターの相談支援係長・看護師長、深野百合子さんはがんバツテン元気隊運営委員兼あけぼの福岡の代表と

して、乳がん体験者たちのピアサポート活動あけぼのハウスを毎月主催されています。がんについての知識がない人に自分の病気のことを打ち明けた時、相手がとっさに固まったり変に気を使わせてしまうのではないかと考えて言いにくい、本当はどのようながんの知識を持つ人にも「自分はがん治療を受けた」ことをその人がうまく受け入れられるように話したいけど、ブレずに分かりやすい話し方をする自信がないという意見もありました。社会全体がより一層がんという病気について慣れていくためにも、自分ががんにかかったことをもっと気軽に話していくことが必要だと感じました。

## あまり知られていない、がん患者のための「社会労務士」「産業医・カウンセラー」「ハローワーク」「相談支援センター」の存在



実際に自分ががんであることを周りに話してみると、実は私の家族も…といった反応に出くわすことも少なくないという意見もありました。がん患者の就労サポートチームとしてまず思い浮かぶのは上司や同僚、医療者、または家族や友人、患者会などですが、専門的な事に関しては社会労務士、産業医・カウンセラー、ハローワーク、相談支援センターなどがある事はあまり知られていません。そこで今回の講演にお招きしたのが、社会保険労務士の渋谷逸郎

さんと、産業カウンセラーの田上裕子さん。ここからは**がんと経済的問題**について更に専門的な知識に踏み込んでいきます。厚生労働省のがんと就労の研究班**治療と就労の両立に関するアンケート調査**によると、がん診断後の就労に関して困ったことの実例としては以下の**6つ**に分けられました。欠勤や退職などによる収入源、また治療費などの支払いが高額、などの経

済的な問題。そして**2つ目**は関係者への病気の伝え方に悩む、傷病手当金などの制度が分からない、勤務形態などの相談窓口が分からないなど、職場の制度や対応への問題。**3つ目**は、通勤や仕事中の副作用や後遺症の問題、**4つ目**は再就職時の病名公表などの問題。そして**5つ目**は仕事への自信低下や取り残される焦燥感、解雇の不安など本人の心理的負担。最後は、診療が平日日中に制限され通えない、治療と仕事の両立に関する相談ができないなどの医療側の問題だとのこと。

## 使える制度を本当にすべて知っているか？日々進化する情報社会



これらの原因を解決し、働く意欲と能力のあるがん患者が社会と繋がりを持ちながら仕事を続けていけるように、また、一度退職しても再就職できるよう支援していくのが我々の仕事だと、社労士の渋谷さんは言います。職場に求めることとして、がんサポート鹿児島県の三好さんも挙げられたように、使える制度の詳しい説明や就業規則の掲示、病名や症状などのプライバシーの順守、治療中や予後不良でも働ける制度や環境作り、在宅ワーク支援など、が

ん患者が抱える不安は決して少なくありません。また、パネリストの方々が共に挙げたのは、**迅速な情報提供**でした。がんの治療法や副作用への対処方法は日々進化しています。しかし最新情報は本ではなかなか上手に得ることができません。そういうときには是非、がん情報サービスサイトを活用してほしいと若尾先生は言います。どこの病院にかかるか、主治医と治療方針について話をするときも、患者側が最新の情報を持つと治療に対する不安や恐れが軽くなり民間療法にむやみに飛びつく率も下がるとのこと。

## 「治りたい」だけではない。「より良く生きたい」へ



パネル討論の中で、就労に関しては医療機関側も産業医と主治医の情報交換が不可欠で、主治医と相談支援センターとの連携が必要だと感じました。厚生労働省研究班が治療と仕事の両立法をまとめた**診断されたらはじめに見るがんの仕事のQ&A**が公式HPからダウンロードできるようになっていると紹介されました。アクセスしてみると、がん患者の就労に関する解決策と、がんに限らず長期療養が必要とされた

場合の就労に関する解決策には共通箇所が多い事に気付きます。**治療と就労に関するネット調査**に寄せられた、患者・家族へのアンケートを踏まえ、研究班の患者作業部会と専門家の共同作業によって作られたQ&Aなので、具体的なアドバイスや、状況に応じた対応策も紹介されており、がん公表、お金と健康保険、家事や子育てなど、読みやすいよう目ごとに分か



れています。ネット環境の整った方は是非ご覧いただければと思います。

**診断されたらはじめに見るがんと仕事のQ&A** [http://www.cancer-shigoto.com/pdf/qaA4\\_2013.pdf](http://www.cancer-shigoto.com/pdf/qaA4_2013.pdf)

さらに、情報交換のための患者同士の交流も大切だと深野さんはおっしゃいます。自分と同じ病気の患者がどのように治療を行ってきて、その都度どのように感じて行動したのかを知ることは、患者にとって強い武器になるとのこと。

副作用や後遺症は患者によって非常に千差万別で、どんなことをしたら精神的負担が軽くなったのかなど、生きていくうえでの支えになる体験のやりとりは非常に有意義で特に女性は同じ病気への連帯感が強いと感じるとのこと。また、がん患者は依頼解雇で中途退職になってしまうケースが多いことがアンケート調査から明らかになりました。これはNPO法人福岡がんサポートセンタースタッフの福田忠昭さんが今回の講演のために福岡県内のがん体験就労者から無作為に92人の方から回答を得たものです。

## がん患者は依頼解雇や希望退職で中途退職になってしまうケースが多い。

### 部下にがん患者がいる上司の負担の大きさにも注意が必要



がんにかかった後に職場を変えたかどうかを尋ねたところ、**3.6割**が職場を変え、収入が減った人は**4.4割**。また、がんのことを職場で相談できない人は少なくなかったとのこと。更に、就労について誰かに相談した人は約**3割**。その中でも相談した人の**6割近く**は、直属の上司だけでした。部下にがん患者がいる上司の負担の大きさにも注意が必要なのかもしれません。復職時期やそ

の後の働き方、メンタル面での支援など考慮すべきことが多いからです。相談相手としてソーシャルワーカーや社会保険労務士への相談がほぼゼロに近いという結果には驚きました。就労支援は、がん患者本人だけでなくその周囲にも目を向ける必要があるのかもしれない。そうした相談業務にこそ産業医も積極的に関わる必要があると思います。

医療ソーシャルワーカーの松尾さんによると、生存率の向上で患者の意識は治りただけでなく、より良く生きたい想いへ変化しているとのこと。働く世代にとって仕事は生きがいや治療の目標になっています。「**周囲の理解と支援があれば、働き続けて社会の支え手になれる患者は多い**」と強調します。患者さんには今ある制度についてどう生きたいのかを第一に制度を活用してほしいと若尾先生もおっしゃっていましたが、まず情報整理、そして利用できる制度を確認、そして今後の見通しを把握した後、会社へ伝える範囲を決めること。がん患者も働き手として頼りになると思ってもらえるような社会で、生きがいを持って働ければ理想的だと思います。少子高齢化によって労働力が減り続けることを考えても、活力維持のためには多くの人に可能な限り働いてもらうことは欠かせないと思いました。

## がんと共存時代を迎えたいま、がん検診受診率50%以上を目標に活動する 「がん検診企業アクション」プロジェクトを推進

2012年6月に改定された厚生労働省がん対策推進基本計画では、新たにがん患者の就労支援が追加されており、具体的な動きもいくつか生まれています。

2013年度予算案には、病院に社会保険労務士や産業カウンセラーを配置し、治療と職業の両立に関する相談支援や情報提供を行いながら就労支援機関との連携を強化する施策も盛り込まれています。また企業や団体への委託事業としては、がん検診受診率50%以上を目標に活動するがん検診企業アクションプロジェクトを推進、現在950以上の企業や団体の賛同を得ているとのこと。

就労や雇用問題は、企業や医療側の課題も多く、大きなことをすぐに変えることは難しい事ですが、今回のような対話のイベントを地道に継続することや、マスコミなどメディアにこの問題をもっと多く取り上げてもらうことが、国や地方自治体・企業を動かす力になるかもしれません。がん患者の就労雇用問題の解決に少しでもつなげていくためにも、このようなイベントを企画し続けることも大切だと感じました。

### 福岡県内でのがん患者の具体的な就労体制



今回の意見交換では、他職種のみなさんごの発言で、経済的な問題をはじめ勤務についてさまざまな問題の一部とその大きさが垣間見えました。また県内でのがん患者の具体的な就労体制についても問題提起されました。全国各地で活躍されている異業種の演者の方々が一堂に会しての議論は滅多にない機会でした。限られた少ない時間ではありましたが質の高い議論

になり、新しい出会いとたくさんの知見を得た一日となりました。

また、サバイバーがますます増えると予想される今後、**社会の再構築**という言葉が何度も使われたように、全ての人のがんの就労について考える時代なのだと感じます。がんと共存時代を迎えたいま、患者だけに限らず誰もが、がんとともに自分らしく生きることが出来る社会環境の確立を願っています。

最後までご清聴頂いた市民の皆さま、ご出席頂いた各関係者の皆さま、そしてピアサポート養成講座受講生の皆さま、ありがとうございました。今後こうした企画の講演会やパネル討論会で、がんと就労がシリーズとして取り上げられ広くアピールされることで大きな動きにつながることを強く期待したいと思います。

今月末にはピアサポート養成講座の修了証授与式と共に、今後の県内でのピアサポート運営委員会第一期の立ち上げについての講義を予定しています。この企画が県内の各病院などにピアサポーターの活躍の場を作っていくための後押しになることを願っています。

## 若尾文彦先生のオススメ

若尾先生がセンター長を務めるがん対策情報センターが今月、働く世代の患者さんに向けた書籍を発行しました。患者さん・ご家族・職場の仲間・地域社会における関係者や医療者の立場からがんと共に働き生きるためには何をすればいいのかどう考えればいいのかについてまとめられています。

タイトルは「わたしも、がんでした。がんと共に生きるための処方箋」。

全国の**がん診療連携拠点病院 367 施設**のがん相談支援センターなどに書籍見本を 1,300 冊配布しておりますのでお近くの相談支援センターにお立ち寄りの際はぜひ見本をご覧ください。



- 編著：国立がん研究センター  
がん対策情報センター
- 発行：日経 BP 社
- 発売：日経 BP マーケティング  
2013 年 9 月
- 四六判サイズ・288 ページ

